縄文時代早期後葉における円孔・突瘤文を施す土器について

太　田　敬　宏

はじめに

縄文時代早期後葉の条痕文系土器の施文技法のひとつに口縁部に円孔・突瘤文が巡るものがある。この施文技法は草創期や早期の撚糸文系土器や子母口式にも見られるが、それぞれに間断が生じており、文様の系譜は明らかでない。施文は焼成前に施され、円孔として貫通させるものと、盲孔であるが内面に押し膨れが出来る突瘤文、内面に影響が見られない円形の刺突列の３つのパターンが存在する。

これらの出土例は千葉県で７遺跡31点、埼玉県で３遺跡11点、長野県で２遺跡６点、茨城県・神奈川県でそれぞれ１遺跡１点ずつであったが、先般報告された雷下遺跡では、１遺跡で147点と、これまでとは一線を画する出土量が確認された。昨年筆者は、雷下遺跡の主体となる第５貝層の有文土器について検討を行い、その中でこれらの土器について従来の連続刺突文系土器とは区別し、新たな系統として考えたいと述べた（太田2020）。そこで本稿では、雷下遺跡出土の本系統の土器の層序的出土状況を確認し、周辺遺跡の事例との比較を行い、そのあり方について検討してみたい。

１　研究略史（第１図）

突瘤文が施される土器の存在は八幡一郎や赤星直忠、池田次郎などによって古くから指摘されている。初めてこの土器に着目したのは八幡と言われており、「北海道の突瘤土器」、「再び突瘤土器について」において、大陸との関係で北海道の突瘤文土器に注目している。その中で、赤星が相模国三浦郡田戸の遺跡にて採集した土器を実見し、「厚さ八ミリ、粘土中に植物繊維を含み、屈曲なき口縁部で黒みがかった色を呈し、内外両面に条痕がある。」と述べている（八幡1938）。赤星は八幡の「北海道の突瘤土器」を受け、「神奈川縣三浦郡吉井貝塚調査」において「口縁に沿って小孔を連ねたものが一例出てゐる（中略）北海道のものが内部から突いたに反して之は外から貫通させてゐる。」と述べている（赤星1937）。池田は八幡の論文の影響を受け、「城ノ台貝塚出土の早期縄文土器の細別」で、千葉県

第１図　吉井城山貝塚出土の円孔文土器

香取市城ノ台南貝塚に突瘤文が存在することから、子母口式が「北方系の文化とある程度の関係を有して居たものではなかろうか。」と述べている（池田1950）。これに対し山内清男は、「拍手を送るものは恐らく日本考古学に精通しない民族学者又は東洋考古学者のみであろう。」と、土器の系統・分布・年代を無視した方法論を批判している（山内1939）。

その後、突瘤文や円孔文が施される土器の資料は増えたものの、多くても１遺跡で10点程度と僅かな出土例であったことから、これらの土器が注目されることはほとんど無かったようである。近年では毒島正明によって茅山上層式に伴う系統の土器として子母口式の中六類型との比較がなされた。毒島は茅山上層式期の特徴として、「条痕を表裏に施文し、繊維を多く含んでおり、口唇部にも刺突、刻目がある。ただし、口唇部に絡条体圧痕文施文がないことと、器面調整で表裏条痕施文が多く、無文・擦痕施文がないことが「中六類型」との違いを見分ける目安になる」と述べている（毒島2016）。

ところが、市川市雷下遺跡において、従来の出土量をはるかに上回る、100点を超える突瘤文や円孔文が施される土器が出土した。また、後述のように、雷下遺跡の層位的な調査によって、その変遷を辿れるか検討することが可能となった。そこで筆者は、これらの土器が最も多く出土している雷下遺跡第５貝層の土器について検討を行い、従来、茅山上層式の施文技法の一つと考えられてきた連続刺突文とは様相を異にすることから、別種の土器として扱うべきと考え、仮に「雷

下類型」と呼称した。その特徴である、円孔の貫通度合いによって３種類に分けられる。

Ａ種：刺突を内面まで貫通させるもの＝円孔文

Ｂ種：内面に押し膨れができ、あわや貫通するかというところでとめるもの＝突瘤文

Ｃ種：通常の刺突文のように表面に凹みができる程度でとめるもの＝刺突文

なお、これらの形状はほぼ真円形となる。また、二つの種が一つの土器に混在するというパターンは確認されていない。施文の仕方は外面からの棒状工具による差し込みに限られ、内面から施した事例はないと言える。

２　雷下遺跡出土土器（第２図）

雷下遺跡は、千葉県市川市に所在する縄文時代早期後葉～末葉にかけての貝塚である。雷下遺跡の貝層は、およそ1000年間というきわめて長期に渡って、縄文海進期の汀線付近に大量の貝殻を廃棄し続けた結果、干潟を徐々に埋め立てて形成された。貝層は、第１貝層～第９貝層と称した貝殻を包含する９枚の堆積層と、これに夾在する貝殻を伴わない間層あるいは貝殻を微量に伴う自然貝層からなる。報告では基本層序を、貝層を包含する堆積土の粒度を基準に設定し、海成堆積物のⅢ'層、第１貝層～第９貝層をⅣ①層（第１貝層）、Ⅳ②層（第２貝層、第３貝層、砂礫層２'）、Ⅳ③層（第４貝層、第５貝層、砂礫層２）、Ⅳ④層（第６貝層、第７貝層）、Ⅳ⑤層（砂礫層３）、Ⅳ⑥層（第８貝層、第９貝層以下）の６枚の大別層に区分した。貝層の形成期間は、主体的な出土土器から早期後葉茅山上層式期～下沼部式期に比定される。本稿ではこれらを上部層（Ⅳ①層、Ⅳ②層）、中部層（Ⅳ③層）、下部層（Ⅳ④層、Ⅳ⑤層、Ⅳ⑥層）の３つに分けて見ていく。

雷下遺跡における出土土器は早期撚糸文系土器から後期堀之内式土器までが確認され、主体となるのは茅山上層式～所謂下沼部式といった早期後葉～末葉までである。これらの内、茅山上層式が全体の約60％、下沼部式が約20％と大部分を占めている。報告では、円孔・突瘤文が施される土器は茅山上層式土器の一種として扱った。この中で、147点（内１点は帰属層位不明）の円孔文もしくは突瘤文、刺突列が施される土器が出土し、すべて掲載している。総じて、条痕文が施された後に円孔や刺突を外側から内側に向けて焼成前に施している。これらの土器は第９貝層相当の層位（青灰色砂層）から出土し始める。砂礫層２から次第に量を増していき、第５貝層で出土量のピークを迎える。その後、徐々に数を減らしながらも最上部のⅢ'層まで確認される。以下では、下部層から上部層にかけて出土土器を概観していく。

下部層（Ⅳ④層、Ⅳ⑤層、Ⅳ⑥層）（１～８）　本層位では、茅山上層式を主体とする。稜や段による区画を設ける古手の土器が出土し、全体的な遺物量も少ない層である。その内、これらの土器は８点出土している。内訳を見ると、Ａ種５点、Ｂ種３点である。一方で５や８のように良好な資料も出土しており、円孔文の出現期を探る上で重要な層であるといえる。Ⅳ⑥層からは、４・７の２点が出土している。４は波状口縁を呈する。円孔文は口縁部に沿わず、一定の位置で直線的に巡る。７は強い刺突が施され、内面に突瘤が出来る。断面図では貫通しているように見えるが、実際は剥離によるものである。Ⅳ⑤層からは、３・５・６・８の４点が出土している。３は円孔文が施され、口縁部直下には炭化物が多量に付着している。５は口縁部が全周する唯一の資料である。ラッパ状に外反し、口唇部には貝殻腹縁文による刻みが施される。６・８は刺突が貫通せず、若干の突瘤ができる。６は垂下する押引文を加え、口唇部には刻みが施される。８の口唇部には、ヘラ状工具による刻みが施される。Ⅳ④層からは１・２の２点が出土している。１は波状口縁を呈し、口縁に沿って円孔文が巡る。口唇部には刻みが施される。２は円孔文が施され、口唇部にはヘラ状工具による刻みが施される。

中部層（Ⅳ③層）（９～38）　本層位では、茅山上層式を主体とし、所謂下沼部式が出土し始める層である。貝層中で最大の堆積規模を示すのは本層位中の第５貝層である。同時期の堆積層である砂礫層２も併せると、遺構・遺物の検出量はⅣ③層で卓越する。その内、これらの土器は116点出土している。内訳を見ると、Ａ種84点、Ｂ種22点、Ｃ種11点と円孔文が卓越する。Ａ種は９～25である。９・13～16・19～22は口唇部に刻みが施される。Ｂ種は31～38である。33～38は口唇部に刻みが施される。31の刺突は他の刺突より径が大きく、竹管状の工具を用いたと考えられる。Ｃ種は26～30である。26～28は口唇部に刻みが施される。これらの施文のほとんどは、円孔文や刺突が施されるだけのシンプルなものであるが、９・12・17・23・34・38などのように茅山上層式に見られる連続刺突文や格子目文、条痕モチーフ、垂下文などの有文土器のバリエーションを組み合わせるものも少数であるが見られる。17は条痕文が円形に施文される。23は集合沈線による

区画を設け、区画内には垂下する集合沈線が施される。34は垂下する押引文が施される。９・12・38は貝殻腹縁文が施される。９は矢羽根状、12・38は縦位に施される。

上部層（Ⅳ①層、Ⅳ②層）（39～49）　本層位では、茅山上層式と所謂下沼部式を主体とし、若干下沼部式が優勢となる層である。その内、これらの土器は22点出土している。内訳を見ると、Ａ種19点、Ｃ種文３点と下部層・中部層と同様にＡ種が多い。Ⅳ②層からは、40～49などが出土しており、本層位まである程度纏まった出土が見られる。48・49を除き、他は全て円孔文が施される。42・44・46は口唇部に刻みが施される。42はヘラ状工具、44は貝殻腹縁によるものである。46は条痕文の施文後に沈線による格子目文が施される。43は口唇部に指頭押圧が施される。47は俯瞰した形状が方形を呈し、口縁部は４単位の波状口縁となる。また、口縁部文様帯に垂下する貝殻腹縁文が施され、横位方向の貝殻腹縁文で区画される。48は沈線による山形文が描出され、刺突列が巡る。49は波状口縁を呈し、円形の刺突が施される。46～48のように円孔文だけで無く、文様帯を有するものもある。Ⅳ①層からは、39の１点が出土している。円孔文が施され、口唇部には貝殻腹縁文による刻みが施される。

３　周辺地域における類例（第３図、第１表）

ここでは雷下遺跡以外で出土している土器を概観していく。飛ノ台貝塚の資料以外は未実見のため、報告書を参考に記述する。雷下遺跡以外では17遺跡、56点が管見に触れた資料である。Ａ種が42点と大半を占め、Ｂ種は５点、Ｃ種は９点であった。口唇部の施文は少ないが、施文パターンは指頭による押圧痕や、刺突、ヘラ状工具による刻み、貝殻腹縁文が施されるものなど多岐にわたる。

１は条痕文が施文された後、内面まで貫通する円孔文が施される。２は器面が荒れており、条痕文が施されるか確認できない。内面まで貫通する円孔文が施される。３は条痕文が施された後、円形の刺突列が施される。４は口唇部に角形の工具で刻みが施される。刺突列も同様の工具で施され、角押し状の刺突が施文される。いずれも刺突は器面の浅いところで止まっており、内面への影響は見られない。５・６は条痕文が施された後、円孔文が施文される。５の口唇部には指頭による押圧痕が施され、小波状を呈する。６の口唇部には刻みが施される。７～16は埼玉県北袋遺跡出土の資料である。千葉県外では最も多くこれらの土器が出土している。すべて条痕文が施された後、円孔文や刺突が施される。７～13は円孔文が施される。７は口唇部に刻みが施される。10の円孔文列の下部に施されているのは補修孔である。11・12は同一個体である。13は内面の剥離による貫通孔が一つあるが、本来は貫通していなかったと考えられる。14～16は孔が貫通していない資料である。14は口唇部直下に爪形文が巡り、その下部へ刺突列が施される。15・16は同一個体である。刺突は強く施され、内面に突瘤が出来る。17の器面は無文で、口唇部には刻みが施される。18は条痕文が施された後、円孔文が施される。19は器面に山形の絡条体圧痕文を施した後、円孔文が施される。本類で絡条体圧痕文が施される例はなく、子母口式の可能性も考えられる。20・21は条痕文が施文された後、刺突が施される。20は半截竹管状の工具で２段の刺突列が施される。口縁部は５のように指頭押圧であろうか、小波状を呈する。21は工具の角度を変えて刺突列が施される。22～24は無文の器面に刺突文が施される。22は波状口縁を呈し、２段の刺突列が施される。23は２段、24は３段の刺突列が施される。刺突文はいずれも浅い。

以下、25～55は千葉県内の出土資料である。25は無文、26～28は条痕文が施された後、円孔文が施される。25・28の口唇部には刻みが施される。いずれも波状口縁を呈する。29・30は条痕文が施された後、円孔文が施される。31は条痕文が施文された後、浅い刺突文が施される。32～34は条痕文が施された後、円孔文が施される。35は無文の器面に円孔文が施される。33は波状口縁を呈する。36は波状口縁を呈し、口唇部に指頭押圧状の施文がなされる。37は条痕文が施された後、円孔文が施される。38～40はいずれも条痕文が施された後に円孔文が施される。38・39は波状口縁を呈する。40は円孔文が施された部分で破損している。41～44はいずれも器面が粗く、条痕文が施されているか不明である。41～43は口唇部に刻みが施される。45は無文の表面に刺突が施される。刺突は強く施され、内面に突瘤が出来る。また、内面には条痕文が施される。46～49、51～55は条痕文が施文された後に円孔文が施される。50は無文の器面に上下２段の円孔文が施される。46・47・51・53～55は口唇部に文様が施される。46は刻みの中に薄く節が確認された。47は口縁部に平行して貝殻腹縁文が施される。51は貝殻背圧痕文が施される。背圧痕文は円孔文の下部にも施される。53は口唇

部にも条痕文が施される。54はヘラ状工具による刻みが施される。55は２条一対で断面が逆m字形となる深い刻みが施される[1)]。

４　小結

以上、円孔・突瘤文が施される当該時期の事例について概観してきた。以下では、早期後葉におけるこれらの文様の分布状況、施文方法、雷下遺跡における出土状況について見ていく。

分布状況　千葉県北西部を中心にして埼玉県域にかけて比較的まとまった出土状況が窺える。その外縁地域となる茨城、神奈川、栃木、長野での出土はごく僅かで、局所的な分布状況を呈している。

施文方法　外側から内側に向けての棒状工具の差し込みによる施文に限られ、内面からの施文は見られなかった。

雷下遺跡における施文の出土比をみると、Ａ種(円孔文)108点、Ｂ種(突瘤文)25点、Ｃ種(刺突文)14点と、Ａ種が卓越し、Ｂ種とＣ種を合わせてもＡ種の半分にも満たない。破片資料が多く、突瘤が剥離しているものを円孔と誤認したものがあるかもしれないが、やはりこれらの土器はＡ種が主体となるのであろう。

周辺遺跡では、雷下遺跡と同様にＡ種が卓越する遺跡がほとんどであるが、坊荒句北遺跡と桜田遺跡では、全てＣ種で占められ特徴的である。また、北袋遺跡では10例中４例、Ｂ・Ｃ種が確認でき、雷下遺跡第５貝層と出土状況が似通っている。

雷下遺跡における出土状況　各種の初現となる出土層位を見てみると、Ａ種は第９貝層、Ｂ種は第８貝層、Ｃ種は第５貝層である。出土層位から、Ａ種は下部層から上部層までほぼ間断なく出土し続ける。Ｂ種はＡ種が出土した直上の層位から出土しており、これらの間に時期差は少ないようである。なお、Ｂ種は第４貝層を最後に上部層では出土しておらず、興味深い結果が得られた。一方、Ｃ種はＢ種と異なる様相を示す。初現となる層位は第５貝層と、Ａ種やＢ種と比較して新しい。また、中部層でのＢ種とＣ種の出土量を比較するとＢ種が優勢となる。Ｃ種はＢ種が見られなくなる上部層でも出土しているが、出土量は上部層で２点と中部層と比較して極めて少ない。

まとめ(第４図)

縄文時代早期後葉の条痕文系土器における円孔・突瘤文を施す土器について、雷下遺跡の出土状況を中心に述べてきた。周辺遺跡の類例から、これらの土器は分布圏が限られる様子が明らかとなった。

では、この土器の系譜はどこに求められるのだろうか。円孔文や突瘤文は草創期や早期の撚糸文系土器や子母口式土器にも見られる。しかし、これらの土器には間隙が生じており、系統的な文様の連続性があるとはいえない。

茅山上層式土器に施される文様で、円孔・突瘤文施文の土器と類似するものでは連続刺突文が上げられる。連続刺突文とは口縁部に棒状工具や竹管状工具などによる刺突が１～複数列巡るものである。

第４図に雷下遺跡の下部層～中部層にかけて出土した連続刺突文が施される土器をほぼすべて掲載した[2)]。連続刺突文は563・568・967・978・1220・1294・1306・1311のように円孔文の施文と同様、口縁部直下に横位の刺突列が巡るものと、42・562・320・87のように山形に施されるもの、口縁下部や胴部に横位の刺突列が巡るものに分けられる。雷下遺跡の例では、口縁部直下に刺突列が巡るものが多数を占め、円孔文の施文と類似している。この土器は砂礫層３や第９貝層と時期を同じくする、最下部の波食台直上から出土し始める。これは円孔文や突瘤文の見られる層位と同一層位であり、いずれの文様もほぼ同時期に存在していると考えられる。

一方で、これらの土器を出土遺物が最も多い第５貝層で比較すると、圧倒的に円孔文や突瘤文が施される土器が優勢となり、連続刺突文が施される土器は極めて少ない。重量比を遺跡全体でみると、連続刺突文を含む有文土器は、茅山上層式土器のうち約13％であり、連続刺突文だけでは10％にも満たない。円孔・突瘤文が施される土器は約20％を占めており、文様を有する土器の主体はこちらにあると言えよう。

上述のように、雷下遺跡では、円孔文が施される土器は茅山上層式土器の古手の段階から伴って出土し、主たる文様の要素であることが明らかとなった。次に突瘤文と刺突文の関係について見ていくと、円孔文は堆積過程のほぼ全時期で見られるのに対し、突瘤文や刺突文は時期的に限られているようである。刺突文と呼称される施文自体は縄文時代を通じて普遍的に見られるものの、本稿で扱った円形の刺突文は突瘤文の消長と入れ替わるようである。ただし、これも時期が下るにつれてほとんど見られなくなる。このような出土状況から、突瘤文と刺突文には明確な時期差があると考えられる。今回は雷下遺跡のみの検討であるため、

今後、同時期の類例についても精査していきたい。

謝辞

飛ノ台史跡公園博物館、畑山智史氏には今回の検討に関わる資料の実見で多大なご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

注

1)46・55の土器について、46は刻みに薄く節が確認された。絡条体圧痕文かもしれない。55は２条一対の深い刻みが斜位に施される。これらは飛ノ台貝塚としては例の少ない子母口式の可能性が考えられる。

2)押引文も連続した刺突といえるが、筆者は引きずった痕跡を有するものを押引文とし、一つ一つを区切りながら施文したものを連続刺突文とした。

引用・参考文献

赤星直忠　1937「神奈川縣三浦郡吉井貝塚調査」『史前学雑誌』第９巻６号

赤星直忠・岡本勇　1962「横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報(一)」横須賀市博物館研究報告(人文科学)第６号

池田次郎　1950「城台貝塚出土早期縄文土の細別」『広島県立医科大学論文集』第２集

茨城高等学校史学部　1971『飯富馬場尻遺跡発掘報告書』

茨城高等学校史学部　1982『馬場尻遺跡Ａ地点発掘調査概報』

市原市教育委員会　2013『市原市天神台遺跡Ⅰ』

太田敬宏　2020「雷下遺跡第５貝層出土土器の再検討－茅山上層式を中心に－」『研究連絡誌　第82号』(公財)千葉県教育振興財団

大宮市遺跡調査会　1987『北袋遺跡』

大宮市遺跡調査会　1989『篠山遺跡－Ⅱ－』

春日部市遺跡調査会　1995『坊荒句北(１・２次)、坊荒句、立山遺跡』

神奈川考古同人会縄文研究グループ編　1983「シンポジウム縄文早期末・前期初頭の諸問題　土器資料集成図集」『神奈川考古17』

金子直行　1991「茅山上層式の再検討」『埼玉考古学論集設立10周年記念論文集』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

金子直行　2008「条痕文系土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会

縄文セミナーの会　2000『第13回縄文セミナー　早期後半の再検討』

佐野市教育委員会　2017『黒袴台・黒袴前遺跡-西浦・黒袴土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書-』

塩尻市教育委員会　1985『堂の前・福沢・青木沢』

(財)千葉県教育振興財団　2007『千原台ニュータウン17－市原市草刈遺跡(Ｋ区)－』

(財)千葉県教育振興財団　2010『千原台ニュータウン24－市原市草刈遺跡(Ｌ区)－』

(公財)千葉県教育振興財団　2017『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書12－市川市雷下遺跡(５)・雷下遺跡(６)・松戸市上矢切南台遺跡(９)－』千葉県教育振興財団調査報告第768集

(公財)千葉県教育振興財団　2019『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書14－市川市雷下遺跡(１)～(４)・(７)～(10)－』千葉県教育振興財団調査報告第780集

千葉県文化財センター　1982「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告』Ⅶ

千葉県文化財センター　1976「五斗蒔遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告』Ⅳ

流山市遺跡調査会　1983『こうのす台第Ⅳ遺跡』

毒島正明　2016「西上総の子母口式古段階－中六遺跡出土土器を中心として－」『千葉縄文研究６』千葉縄文研究会

松本市教育委員会　1995『松本市和田遺跡･桜田遺跡･堂田遺跡･樋渡し遺跡』

三輪野山八重塚遺跡調査会　1982『三輪野山八重塚遺跡』

山内清男　1939『日本遠古之文化：補註附』先史考古学会

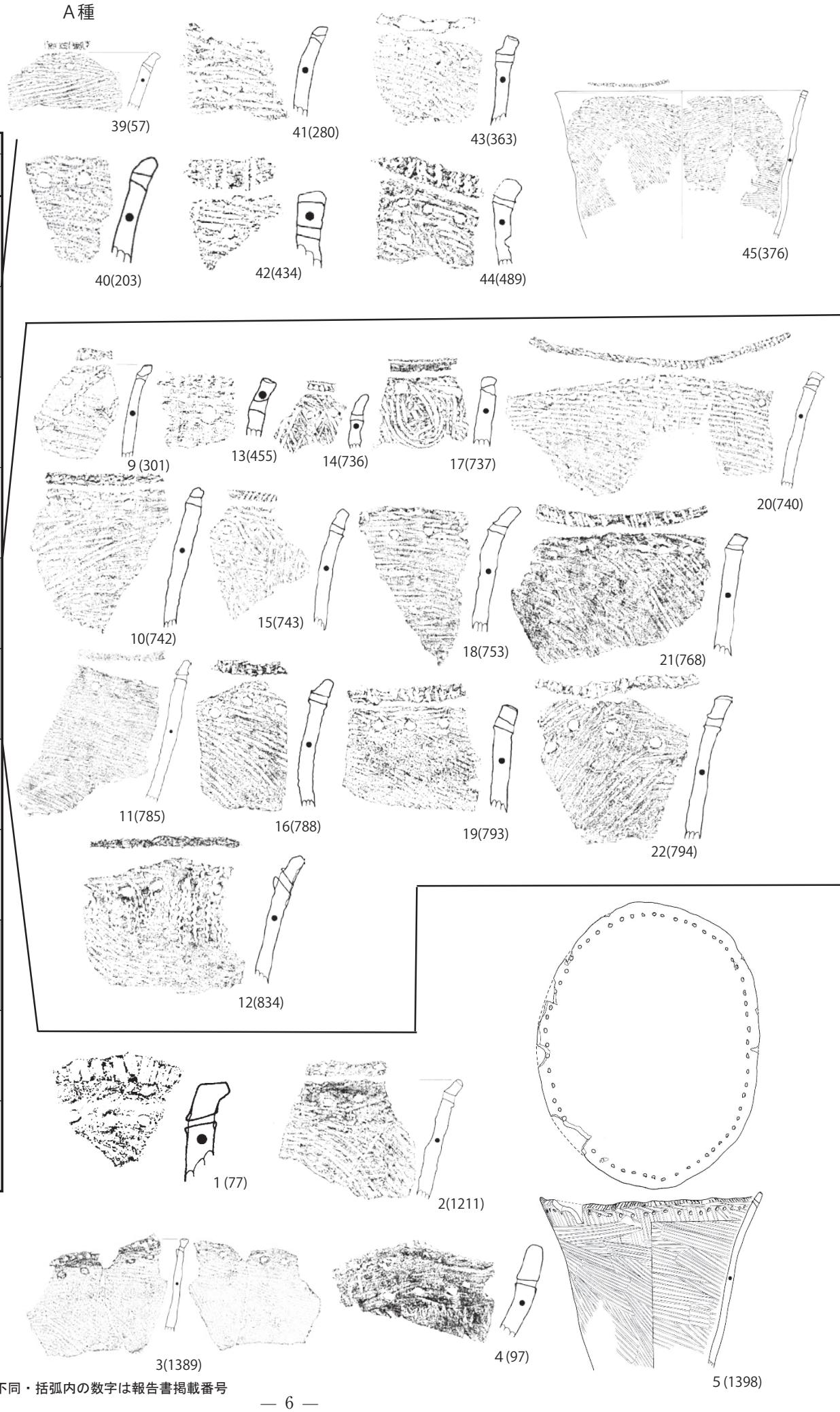
山本暉久　1979「縄文時代」『上浜田遺跡　神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告15』

八幡一郎　1936「北海道の突瘤土器」『考古学論叢』第２輯

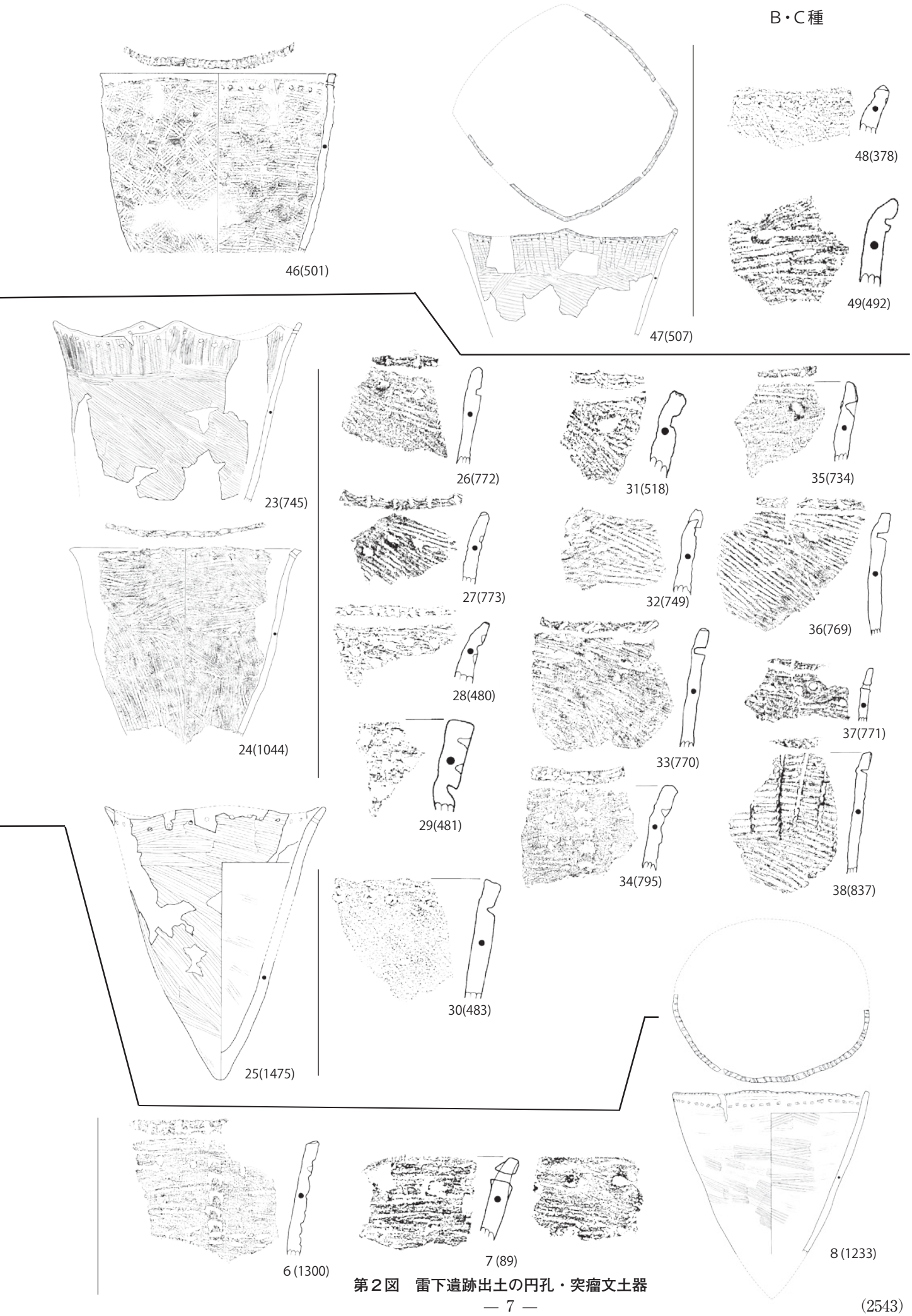
八幡一郎　1938「再び突瘤土器に就いて」『考古学論叢』第９輯

横須賀市教育委員会　1999「吉井城山－神奈川県指定史跡吉井貝塚を中心とした遺跡」史跡整備事業に伴う確認調査の記録－『横須賀市文化財調査報告書　第34集』

基本層序		^{14}C年代
大別層序	細別層序（抜粋）	^{14}C BP (cal BP)
Ⅲ'	青灰色シルト層	3305±20 (3580–3460)
Ⅳ①	第1貝層	6230±30 (7250–7145)
Ⅳ②	第2貝層〈砂礫層2'〉	未測定
	第3貝層〈砂礫層2'〉	6520±30 (7505–7410)
Ⅳ③	第4貝層	6635±30 (7576–7461)
	第5貝層〈砂礫層2〉	6665±30 (7590–7480)
Ⅳ④	第6貝層	7040±25 (7940–7826)
	第7貝層	7570±30 (8130–7945)
Ⅳ⑤	砂礫層3	未測定
Ⅳ⑥	第8貝層	7590±30 (8145–7960)
	第9貝層〈波食台〉	7715±30 (8295–8065)

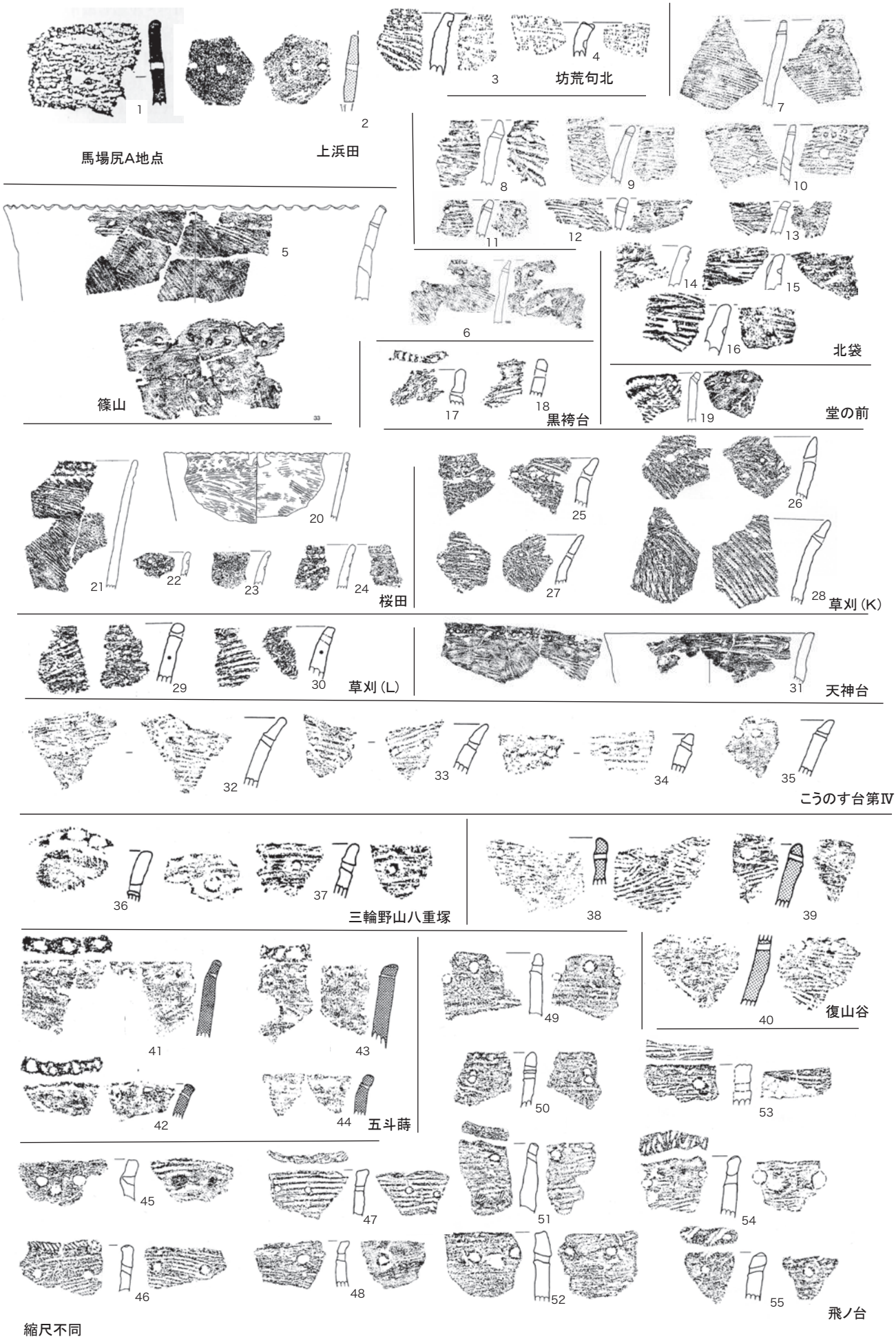


縮尺不同・括弧内の数字は報告書掲載番号



第２図　雷下遺跡出土の円孔・突瘤文土器

(2543)

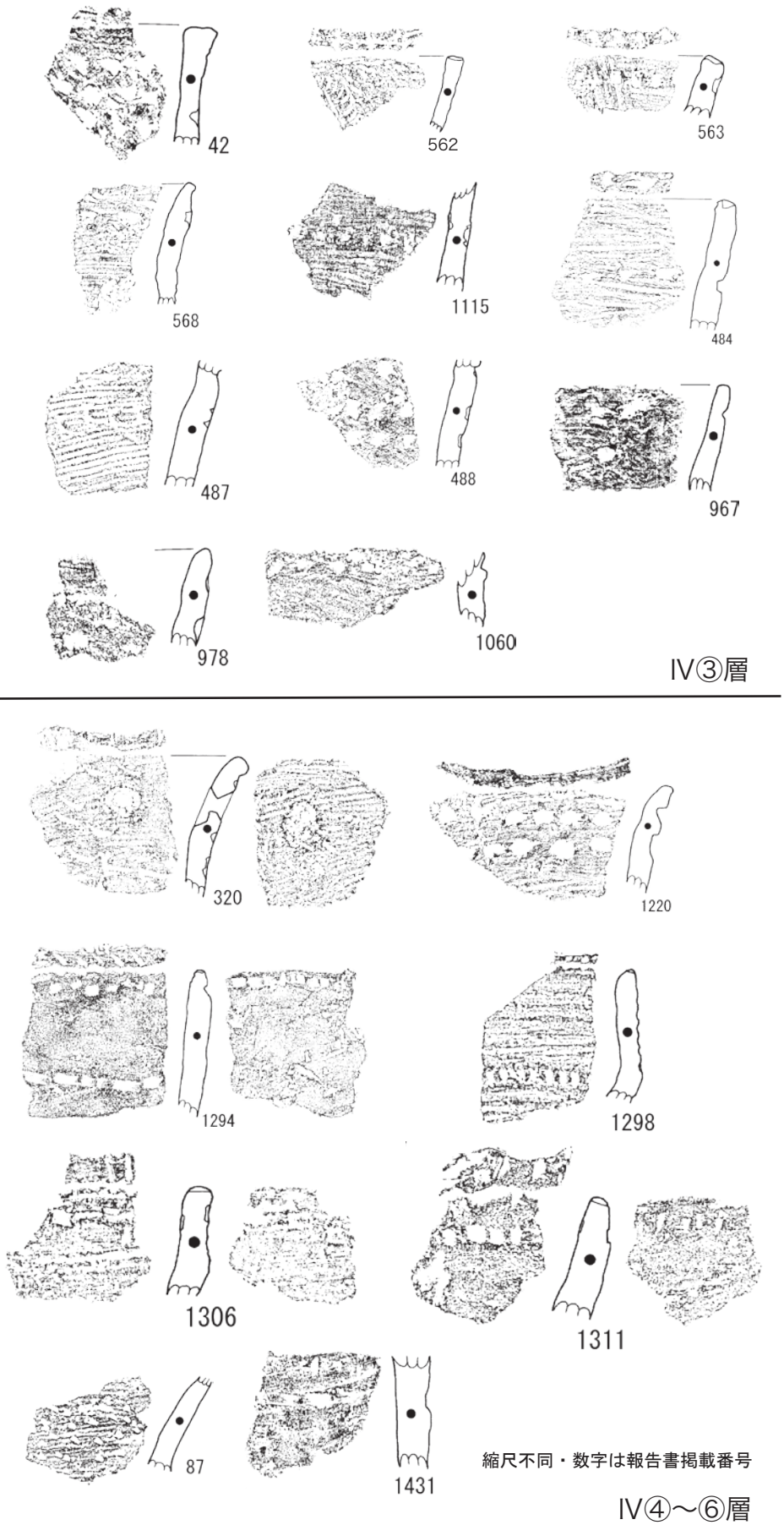


第３図　周辺遺跡の円孔・突瘤文土器一覧（遺物№は第１表と一致）

第１表　周辺遺跡の円孔・突瘤文土器一覧（遺物№は第３図と一致）

遺物№	都道府県	市区町村	遺跡名	円孔状態	口唇部施文	文献
1	茨城	水戸市	馬場尻Ａ地点	円孔		茨城高等学校史学部1971
2	神奈川	海老名市	上浜田	円孔		山本1979
第１図		横須賀市	吉井城山貝塚	円孔		赤星1937
3	埼玉	春日部市	坊荒句北	刺突		春日部市遺跡調査会1995
4				刺突	角形工具による刻み	
5		大宮市	篠山	円孔	指頭押圧	大宮市遺跡調査会1989
6				円孔	刻み	
7		大宮市	北袋	円孔	刻み	大宮市遺跡調査会1987
8				円孔		
9				円孔		
10				円孔		
11				円孔		
12				円孔		
13				突瘤?		
14				刺突		
15				突瘤		
16				突瘤		
17	栃木	佐野市	黒袴台	円孔	刻み	佐野市教育委員会2017
18				円孔		
19	長野	塩尻市	堂の前	円孔		塩尻市教育委員会1985
20		松本市	桜田	刺突	指頭押圧	松本市教育委員会1995
21				刺突		
22				刺突		
23				刺突		
24				刺突		
25	千葉	市原市	草刈（K）	円孔	刻み	㈶千葉県教育振興財団2007
26				円孔		
27				円孔		
28				円孔	刻み	
29			草刈（L）	円孔		㈶千葉県教育振興財団2010
30				円孔		
31			天神台	刺突		市原市教育委員会2013
32		流山市	こうのす台第Ⅳ	円孔		流山市遺跡調査会1983
33				円孔		
34				円孔		
35				円孔		
36			三輪野山八重塚	円孔	指頭押圧	三輪野山八重塚遺跡調査会1982
37				円孔		
38		白井市	復山谷（CN204）	円孔		千葉県文化財センター1982
39				円孔		
40				円孔		
41		印西市	五斗蒔（CN605）	円孔	刻み	千葉県文化財センター1976
42				円孔	刻み	
43				円孔	刻み	
44				円孔		
45		船橋市	飛ノ台貝塚	突瘤		船橋市飛ノ台史跡公園博物館2007
46				円孔		
47				円孔		
48				円孔		
49				円孔		
50				円孔		
51				円孔		
52				円孔		
53				円孔?		
54				円孔		
55				円孔		

基本層序		^{14}C年代
大別層序	細別層序（抜粋）	^{14}C BP (cal BP)
Ⅲ'	青灰色シルト層	3305±20 (3580–3460)
Ⅳ①	第1貝層	6230±30 (7250–7145)
Ⅳ②	第2貝層〈砂礫層2'〉	未測定
	第3貝層〈砂礫層2'〉	6520±30 (7505–7410)
Ⅳ③	第4貝層	6635±30 (7576–7461)
	第5貝層〈砂礫層2〉	6665±30 (7590–7480)
Ⅳ④	第6貝層	7040±25 (7940–7826)
	第7貝層	7570±30 (8130–7945)
Ⅳ⑤	砂礫層3	未測定
Ⅳ⑥	第8貝層	7590±30 (8145–7960)
	第9貝層〈波食台〉	7715±30 (8295–8065)



第４図　雷下遺跡中・下部層出土の連続刺突文土器